
ネギま × 東方.....ネギ君の華麗なる日々

アリストリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま×東方……ネギ君の華麗なる日々

【Nコード】

N5459Q

【作者名】

アリストリア

【あらすじ】

見たければ見ればいいと思う。とりあえず、これはネギ君が東方の世界に行ったり帰ったり行ったり帰ったりするお話です。独自設定が幾つかあります。

プロローグ？

「……」

メルディアナ魔法学校図書館立ち入り禁止区域。

その場所で僕は一人、薄暗い場所で座り込み、ロウソクを一本立てて、ひたすら本を読んでいた。

「……」

メルディアナ魔法学校図書館立ち入り禁止区域。あらゆる曰く付きの魔法書または魔術書などが置いてある場所。奥に行けばいくほど危ない本がたくさん本棚に納められている場所。今僕が居る場所は奥の奥、一番危ない区域である。

教師などは入れず、ただ入れる人物は此処のメルディアナ魔法学校の校長のみ。

それを僕は密かに立ち入り禁止区域に入り、本を読み知識を蓄えていく。

「……」

僕の横には次読む本を置いている。

ここにある魔法書などを読んで覚えようとしているのだが、難しく、一つ一つの本に、なにか不気味な魔力がついていたりする。

（なるほど……次の魔法書は……魔法書？）

僕は読んでいた魔法書を元の本棚に置き、違う魔法書を手に取るうとしたのだが、その本の横に、魔法書とは違う、何か分厚い日記みたいなものを見つける。

「題名：レミリア・スカーレットについて。王立騎士団団長メルアナ・アルスタード。日記かな？ あっ……」

声を出してしまった事に少し後悔する。

前に一度だけ見つかり、とても怒られたのは、まだ新しい記憶だ。その本は魔法書というより日記というほうが正しいと思える。此処にある魔法書は何かしら魔力を秘めたものなのだが、この本にはまったくもって魔力の魔の字もない。

（……ちよつと休憩のつもりで読んでみようかな。えつとなになに。1939年10月4日 午後20時23分に、あのレミリア・スカーレットが住む館があるというイギリスに到着した）

吸血鬼、人の血を吸い生きながらえるバケモノ。

とある話によると、吸血鬼の腕力は一撃で山をも粉碎し、スピードは3キロを10秒もかからずに走りぬいてしまつとか、色々ある。

そのバケモノである吸血鬼を倒す方法、心臓に杭を、首を切り落とす、吸血鬼を燃やして灰を川に捨てる、今の僕が知っているのはこれぐらいだけ。

（1939年4月20日 イギリスの飯は不味い。早くアメリカに帰ってベーコンでも食べたい気分だ……不味くて悪かったですね。

1939年4月21日 イギリス人の味覚は子供なのか？ コーヒーを泥水扱いするなんて、私には理解できない。

1939年4月22日 まさかの白の地獄単騎待ちとは、今日は少し金がなくなった）

最初はこのような私生活の日記みたいなものだったが、最後辺りになると少し変化が訪れた。

（1942年5月12日 とうとうレミリア・スカーレットの居場所を見つけた。見つけたはいいが、少し驚いたことがある。レミリア・スカーレットが住む場所と、此処メルディアナ魔法学校、今私が住居を借りている場所だが、此処からレミリア・スカーレットが居る場所は、なんととても近い。

歩きで1日かかる、それぐらいだ。まさかこのような近くの場所にあるとは……日本語のことわざで言う、灯台下暗しというものだろうか？ 意味があっても別に構わないのだが……明日、私はレミリア・スカーレットがいるという場所に行こうと思う。

歩きで1日かかる程度、飛行魔法ならば5時間程度でたどり着くであろう）

次のページをめくる。怖いのだが続きが気になってしまふ。知的好奇心というものだろう。自分で自分を抑えきれない。

（1942年5月13日 後数時間も着くだろう。とりあえず此処で一応レミリア・スカーレットについて書こうと思う。

本国のクラウナダ異界国境魔法騎士団が300年前に何度か、魔法騎士団を数千人を引きつれ、紅い悪魔の討伐に向かったことがある。

魔法騎士団、それも選りすぐりの精鋭騎士団。この騎士団が紅い悪魔、レミリア・スカーレットと数度に渡り交戦。結果、騎士団は全滅。生き残ったものは0人。

レミリア・スカーレットに日の光は弱点ではないということ。騎士団は馬鹿ではない、相手の分野である夜に交戦するなどしなかった。が、惨敗だった。

そして40年くらい前に、稀代の天才である魔法使い、いや生粋の魔女、異端児とも言えるパチュリー・ノーレッジがレミリア・スカーレットに従っているという報告もあった。

まったくもって今からレミリア・スカーレットを調査しに行くなんて、馬鹿な任務を引き受けたものだと思う。数年前の自分を殴ってやりたいものだ。

もしも生きて帰ってこれたなら続きを書こうと思う。

もし死んだ時のために、この本には保険を掛けようかと思う。私が見たらこの本はメルディアナの校長の机の上に現れるように魔法を施した。どうか、そのような事がない事を祈りたい）

ここでこのページは終わっていた。

とても長かったがとても続きが気になる。

(えーっと、次のページと……あれっ?)

開けるとまったく何も書かれてないページがあるだけであつた。
何故白紙なのか。考えられることは1つだけ。

(……………今日は寝ようかな)

もうロウソクの火が消えそうになっている。
別に怖いから寝るとかじゃなく、本当に怖いとかじゃないはずだから。

この本を閉じ、元の場所に戻そうとしたら。

「誰じゃっ！ 此処に入ってるのは！」

(あっ！ やばいかもっ！ 絶対に校長先生の声だ！)

禁止区域は少し特殊で少々騒いだとしてもばれないのだが、時々校長が見回りに来ることがある。

その時間帯を把握していたと僕は思っていたのだが、どうやら把握しきれてなかったらしい。

僕は急いでこの場から校長にはれないように立ち去った。
戻そうとした本を持ち抱えたまま……。

ブログ？（後書き）

感想あれば返事しますというより、矛盾点ありすぎだと思いますが、ご指摘お願いしたり……。

ブローグ2? (前書き)

うーん、ネギ君ってこんなに書きぬくかったっけ？ あれれ？
んか違うんだよねえ。

な

ブローグ2？

図書館から戻ってきた僕はゆっくりと薄暗い自分の家の扉を開き、『ネカネ姉さん』の部屋、『アーニヤ』の部屋に足音が響かないように自分の部屋に行く。

姉から夜に歩いても良いという許可が下りている。下りているのだが、時刻はちゃんと決められている。決められているのだが大幅に過ぎたりすると、こういうふうに自室で寝ているのである。

明日になって怒られるのは確定しているのだが、今日怒られるよりはマシである。

こういうのは少し緊張してしまうもので、足音を立てないようにゆっくりとゆっくりとするのが楽しい、そして自分の部屋に到着し、ため息を一つ。

部屋を明るくするため。魔法でロウソクに火をつける。

窓から星と月の光が部屋を照らしてくれるので、ロウソクに火をつける必要はないのだが、なんとなく薄暗いのは嫌なのだ。

少し心臓がドキドキしているが、先ず手に持っているものを見る。それはあの立ち入り禁止区域にある本であった。

「……」

その後、僕は校長に見つからずに立ち入り禁止区域から出れたのだが、なにをどう間違えたのか、あの本を持ったまま逃げてきてしまったのだ。

——やってしまった。

つつい額に手を置いて、天を仰ぐ。

この本を返そうにも当分は返せないだろう。

僕は図書館で見つかりかけてしまったのだ。

多分というより絶対に数日間、校長先生は警戒を強めるだろうと確信できる。

けど、僕はこの本を返すことを拒んでいる感じがするのである。

(レミリア・スカーレット……それにパチュリー・ノーレッジ)

レミリア・スカーレット。この吸血鬼に僕は興味が、いや、会ってみたくなった。それにパチュリー・ノーレッジという人物にも。単純な好奇心、怖いもの見たさ。

(……会ってみたい)

今日、この本に出会った。

この本を、直ぐ近くにある本棚に入れる。

服を脱ぎずつと愛用している熊さんのパジャマを着る。

壁に掛けられている時計を一瞥する。時刻は2時。門限は20時までとなっている。

体をポフンと柔らかいベッドに預け掛け布団を被る、その柔らかさで急激に睡魔が襲ってくる。

（お休みなさい姉さん。消灯します）

瞳を閉じる。僕は睡魔に意識を預ける直前、本棚に置いた本が紅く光ったような気がした。

姉さんと一緒に寝たりすることは良くあるが、しかしながら、近頃は一人で寝る習慣をつけようと頑張っている。

一人で寝るという苦行はとても辛い、などと近頃僕は思っている。

ピッピッピッピッピッピ

時刻は朝の7時11分。

朝日がベッドで寝ている僕を照らし眠りを妨げようとしている。それに加えて目覚まし時計がなるというコンボが厳しい。

「……むう」

朝日が眩しく辛いなどと思ったりはしないものだろうか。
僕はとても朝が辛い。

だから、掛け布団を頭からかぶりながら睡魔という悪魔、起きろ
起きろと騒ぎ立てる目覚まし時計の騒音に悪戦苦闘中。

「ね、たい。ねむたい」

掛け布団から手だけを出して目覚まし時計を止める。

「……」

足に力を、腕に力を入れて掛け布団から出ようと頑張るのだが、
気のせいだろうか、一向に掛け布団が体から離れようとしないので
ある。

「……むう」

両手と両足に力を入れていたのだが、力を抜いた。

あの騒音の目覚まし時計を仕留めたのが失敗だったのか、睡魔と
いう悪魔の圧倒的な物量に僕は大敗。

「おやすみ——」

「なさいはさせないわよ！ 早く起きなさい！」

物量を押し返すほどの援軍の到着。その名をアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。通称アーニヤと呼ぶ。

長くルビーのように紅い髪の毛をツンテールに、そして特徴的なのは、髪の毛と同様、惹かれるような真っ赤な瞳だ。起こしてくれるのは嬉しい、起こしてくれるのは嬉しいと思う反面、もっと寝たいから迷惑だと思っている自分がいるんだよね。

「ネエエエギイイイイ！ 起きなさああああい！」

すっばらしく朝からハイテンションなアーニヤは僕の掛け布団を握り剥ぎ取ろうとする。

僕を包んでいた掛け布団を剥ぎ取ろうとしているアーニヤに言いたいことがあります。もう少し優しく剥ぎ取ろうしてほしい。少し抵抗したくなるから。

「掛け布団を掴んでカタツムリみたいにならないで、早く起きなさああああああい！」

般若の形相……というより僕からは見えないけど、凄く怒っているのが分かる。

そして抵抗空しく掛け布団を剥ぎ取られた。

「ひどい……」

掛け布団という名の防具を失った僕はなんとも言えない喪失感に悲しくなってくる、まるで自分の手足を無くしたかのような喪失感。強制的に朝ということを目覚めるしかなく、ベッドから降りる。

「やっと起きたわね……」

左手に腰を当て右手を中に泳がしながら、やれやれと言った感じだった。

その姿が少し気に食わないのだが、表情に出さない。

出した瞬間に僕の命日が訪れてしまうからである。まったくもって悲しいことです。

「なによ、毎日起こしにきてあげてるんだから、少しぐらい感謝しなさいよね」

感謝はしたい、感謝はしたいが今の心理状況では絶対に感謝できないよ、アーニヤ。

もう少し後で言うてほしかった。

「まあいいわ、それよりネギ、あんたまた門限を大幅に過ぎて帰ってきたでしょ」

「気のせいじゃない？　僕はちゃんと門限に合ったよ？」

一応嘘をついてみる。嘘をついている事はバレバレであるだろうけども、なんとなく反抗したくなる気分なのだ。

「あ・ん・たつてほんとに……よくまあそんな嘘がつけれるわねええええええ！」

「嘘じゃないよアーニヤ」

キラリと歯を見せる。

自慢じゃないけど僕の歯は白くキラキラ光る。少しカッコよく、キリッとした感じで歯を見せるのがポイントなのだ。

「僕の腹時計は門限ジャストだったのさっ」

「あんたの腹時計なんて知るかバカアアアアア！」

すごい怒鳴り声だと思うが、このような事は日常茶飯事に起きている。だから、べつに煩くもなんともない。

「ふう……今日は休みだからゆっくりしたいんだけど？」

今日は学校の創立記念日で休みなのである。だからゆつくりしたい。

それに昨日、というより今日持って帰ってきてしまった本を読みたいのである。

「なにぐうたらしたいと言ってるの！ まったく、これじゃあぐうたら人間になっちゃうわよ？」

「それは望むところかもね？」

「望むなっ！ このバカ！」

アーニヤの前だとしても、こんな感じでふざけたくなってしまうのは変なのだろうか、少し自問自答をしたくなってきたりする。ちなみに姉さんにもアーニヤと同じような感じでふざけている。多分僕は相手にしてほしいんだと思う。構ってほしいんだと思う。ぶんすかと怒りながらも掛け布団をベッドの上にちゃんと置き、整えてくれているのはなんと嬉しいことだろう。

「まったく、朝から疲れるわ。ネギ、パンを食べに行くわよ。ついでにネカネさんの説教つきだけどね」

「えー、まあいいか……パンを食べに行くけどさ、いつまで此処にいるの？」

アーニヤは剥ぎ取った掛け布団を綺麗にたたみベッドの上に置き

ながら、何言ってるのよと返事をしてくれる。

「服を着替えたいんだけど？」

「別に着替えたらいいじゃない？」

恥ずかしさに目覚めてる僕にとって、女の子の前で服を脱ぐのは
恥ずかしすぎるのでした。^{まる}○

「ネギ、どうしてこんなふうに……ああ、頭が少し痛い」

絶賛ネカネ姉さんの説教を、パンを食べながら聞いています。
テーブルの上には牛乳とパンが、アーニヤ、僕、ネカネ姉さんに
2枚ずつ配られており、僕はただいまその2枚のうち1枚をムシャ
ムシャ食べてます。

「まったく、ちゃんと門限は守るのよ？ いいわね？」

右手で腰に手を当て、左手で指をピンと伸ばし僕を指差しながら
言った。

人を指差したら駄目だと言っころから姉さんは言っていますが、ど

うやら家族だと良いようです。

「ごめんなさい、そうパンを食べながら、ネカネ姉さんに謝る。」

「本当にゴメンなさい。これからは気をつけよ」

ネカネ姉さんは、口だけは達者なんだからと言いながらも、嬉しそうに机の上にあるパンに手を伸ばす。

美味そうに食べるその姿は、まるでハムスターのようである。

「姉さん姉さん」

「ん？ なにかしら？」

口の中にあるパンをゴックンして姉さんは返事をしてくれる、今日の予定について姉さんに話をしておく。

「今日、学校休みでしょ？」

「確かに休みだけど……どうかしたの？」

ネカネ姉さんは返事をした後、またパンをもふもふと食べる、喋るとき口ある食べ物食べてからなので、行儀は良いのか？

「今日ちよつと家に一日中いるつもりなんだけど、別に僕に対して用事とかないよね？」

今日はできる限り、一人で居たいのだから、用事があれば先に済ましたい。

「んー？ 私は別に用事はないけど……アーニヤちゃん、なにか用事とかあるかしら？」

「ふえ？」

いきなり話を振られて少し困惑中のアーニヤであったが、直ぐに気持ちを持ち直し、腕を組んで考え出す。

その姿は少し可愛いと思った。

「私もべつにないけど……けど、ネギにしては珍しいわね？ 休みの日と言えば、いつも魔法学校の図書館に行って勉強するのに」

メルディアナ魔法学校の図書館は、学校が休みでも自由に入ることができる。できるのだけでも、僕にしたら行きにくいわけで。

「えーっと、ほら、ちよつと勉強ばかりしてたから、今日は家でゴロゴロしてたいなーって」

「うー……用事はないんだけど、その、ネギと一緒に遊びたいなって思ってたりするんだけど……」

などと、少し頬を赤くして目線を下に落とし手をもじもじしているアーニヤ。

凄く可愛いと思ってしまっってしまう僕は、なんともませた子供だと自覚しちゃうのが悲しくなっちゃうものです。

これでも年齢は数えで8歳なんですよ？

「ええっと……」

なんと言えはいいのでしょうか。今日はあの本を読んで妄想を膨らませるつもりだったのだけど……。

「僕もアーニヤと遊びたいと思ってたところだよ。一緒に遊ぼうか」

先ほど言ってたことと矛盾してるけど、アーニヤは気づいてないらしく、とても喜んでる様子。

本のかたちは夜になりそうかも……。

とりあえずアーニヤと遊びますか。

プロローグ2? (後書き)

とりあえず、次話からやつと東方キャラが出てくるかもしれない。

しかし、出してからの展開を考えてない。

色々と考えられるのが、東方の世界でぐうたら過ごすネギ君を書くか。

1年ほどすっ飛ばして、原作に突入するか。

もしくは、幻想郷でぐうたらしていたネギ君が、平行世界に移動しちゃうてきな展開に(超展開)

まあ、適当に気が向くままに書いていきます

感想とかあつたらおねげします。

プロローグ 3

只今の時刻は夜の2時。

僕は只今夜更かしをしている。

今日は朝から大変だった、『一緒に遊ぼう』なんて言わなければ良かったと後悔しても遅いものは遅かったのだろう。

既に深夜の2時である。つまりアーニヤとは既に遊び終わっている。そう、4時間前に終わった、22時に終わった。

心身ともに疲れたと言っても過言ではない。

僕は体を動かすのは嫌いではない、嫌いではないのだが、疲れきるまで体を動かすという行為は嫌いだ。

門限の20時まで家の外で遊び、20時を過ぎたら家の中で遊んだという1日だった。

そしてアーニヤと遊び終わった後に、あの日記を調べてみたりしてみたのだが、どうもなにか魔法が付与されているのを発見した。

まさかあの日記を本棚から出そうとした瞬間、いきなり赤く紅く真っ赤な真紅の光が日記から発せられたのには流石にビックリしたのだけでも、そのときに魔法が付与していることが分かったのである。そのときの時刻は0時ジャスト。

一体何の魔法なのかは僕には全然分からないのだ、分からないのだが分からないなりに調べている。

「うーん……なんの魔法なんだろう」

ベットに体を仰向けにしながら、日記に付与されている魔法が何

なのか、それを考える。

分らないからいくつかの予想を言葉にする。

「王立騎士団団長メルアナ・アルスタードさんの……いや、違うかな」

考えを一瞬で否定する。

メルアナ・アルスタードさんの魔法が現在も続いているという仮説なのだけでも、なんとなく違う。

その理由が二つある。

1つ、魔法は長時間付与できない。いくらなんでも何十年も維持できるような魔法はないだろう、それに物質の転移魔法なんてそう長く続くわけが無い。まあ魔法書……グリモワールみたいに一文字一文字魔力を込めながら書けるのならば不可能ではない。

だけどそれは大がつくほどの魔法使いじゃないとできない。

王立騎士団団長っていう大層な肩書きがあるのだからそれは有名な魔法使いだったに違いない。

違いないのだが、多分無理だろう。魔法騎士団団長クラスならばできていたかもしれないけどね。まあ、実際見たことないから勘だけ。

2つ、人間とは違う魔の魔力を感じた。

一瞬だったけど感じ取れたと思う。だけど、本当に光ったのは一瞬だったから気のせいだったのかもしれない、だけど、それを気のせいにしたくない。

「誰かが日記に細工をした？」

誰かがアルスタードさんの日記に細工した。というのが最有力の候補なのかもしれない。

しかし、そのようなことができる人物は限られているだろう。

メルディアナ魔法学校の校長であるおじいちゃんならば何時でも可能だろうけど……可能性は低い。どうして魔法を付与するのか。完璧に魔法をかける意味がないだろう。自身が近くににいるのに何故魔法をかける意味なんてあるのか。

色々と考えられる人物を除いていくと、残ったのは2人だけ……

「……魔女であるパチュリー・ノーレッジの可能性。または紅い悪魔、レミリア・スカーレットの可能性かなあ」

可能性は高い。高いのだがどうして魔法をかけているのかということだ。

それが分からない。

それに何十年も魔法をかけとけれるなんて凄いとしか言いようがない。

「……もう一度だけ光ってくれたら分かるんだけど」

ベッドから起き上がり本棚にある、あの日記を持ち2回ほど強めに叩く。

八つ当たりみたいなものなだけでも、致し方がない事だと思った

い。

「反応はないか……」

八つ当たりをしながらも、光ってほしいなど思っていたが、反応のはの字もない。

日記をその場で開き、白紙のページを何回も見つめる。

「やっぱりなんもないよねえ……」

白紙のページをペラペラと何回もめくりながら変わった所はないか調べていく。

「結局……」

なにもなかった。

日記を閉じて少し深めにため息をはく。ため息をつかなければやっつけられなかったから。

進展はなし。つまり数時間無駄にしたということになる。

勉強をしとければよかったと後悔しながらも、どうしてもこんなに執着してしまのうのかと、興味を持ってしまったからだと思ってものなにか違う感じがするのだ。

「考えてもしかたがないよね……」

もう一度だけ日記を開ける。

どうせ変化なんてないんだろうな、口に言葉を出しても、心の中
ではなにかしら変化があつてほしかった。

「変化は……やっぱりなしか」

言葉をはい吐いた瞬間、唇からよだれが落ちた。

「あ……」

口元を着ている服の裾で拭く。
拭いたのだけでも……

「どうしよう……これ、今拭いたら破けるよね」

日記に目を落とすと紙に僕の唾液が染み込んでいた。

「あわわわわわわ……どうしようどうしよう」

この日記は一応立ち入り禁止区域にあったのだから、汚してはいけないものなのだ。

どうすればいいのか、目を瞑り頭の中で色々と対策を思い浮かべようとするのだけど、全然思いつかない。

「……やっちゃった」

『そうね、やっちゃったわね』

「どうすればいいのかな？」

『諦めなさい』

諦めたほうがいいのかなあ……本当に諦めたほうがいいのか。

「なにかないかな？」

『証拠隠滅すればいいんじゃないかしら？』

「けど、そんなことできないし」

できないよ……ってあれ、僕は誰と話してる？
僕は一体誰と話をしている？

『そうねー……咲夜なにかないかしら？』

『どうすることもできないですね』

『だそうよ？ あれま、聞こえてないみたいね……』

『お嬢様、私達の声のせいで固まっているようです』

誰と話している？ 周りを一度見る。

何時も通り僕の部屋で誰もいない、変わった所などない。

「……誰かいるのですか？」

声を出して先ほど聞こえた声の人物達に問いかけてみる。

僕が見る限りこの部屋には誰もいない。いないのだけど……

『そうね……その部屋には居ない、だけど私達は貴方の姿を見ているわよ？』

『小さな少年、日記を一度見てくれたら分かります』

「日記を……？」

日記を見る。

『こちらを見せてるかしら？』

日記は変わっていた。明らかな変化があったのだ。

『ん？ 見えてないのかしら？』

『多分混乱しているのでしょう』

白紙だったページ。

どうしてこうなったのかは分からない、なにかの魔法なのだろう。
ただ2つ言えることは……

「人が映ってるうううううううううううううううううう！」

白紙だったページに女の子が2名映っていたのと、僕の悲鳴が家中に広がったということだ。

プロローグ3（後書き）

ネギ「……」

咲夜「……」

レミ「暗いわね」

こあ「食らいたいですねえ」

レミ「誰を食らいたいのかしら？」

こあ「そりゃネギ君を（性的な意味で）」

レミ「シヨタコンめ……感想待ってるわよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5459q/>

ネギま×東方……ネギ君の華麗なる日々

2011年10月6日03時40分発行